

シン学校プロジェクトキックオフミーティング報告要旨

日 時：令和5年11月26日（日）午後1時30分～3時30分
場 所：尾西生涯学習センター6階大ホール
参加者数：168名

第1部 基調講演「これからの学校づくりを考えるために」

講師：東京電機大学教授 伊藤俊介氏

学校の標準設計の原型は明治時代にある。廊下が片側にあってそれに沿って教室が並んでいるスタイルはこの頃からの標準設計。同じ造り方をすると200年前のモデルを踏襲することになる。今までの学校もちゃんと機能しているが、次どういことをしたいかというところに向けて発想を変える必要がある。

建物は概念の型になりがちであり考え方も建物の型に囚われてしまうため、これから先の教育を目指してどう変えていけるかが学校づくりの1番重要な課題。

一斉授業形式から脱却し、個別・主体的な学習が実現できる環境の実現が大事。オープンスクール、教室に加えてラーニングセンターや多目的ホールという広い空間があり、そこに子どもが散らばって学習をするスペースがある。散らばって学習をするということは、集団の大きさを変える、つまり先生が教えるのではなく数人で探究的な学習をするであったり個人で勉強をするであったり隣のクラスと合同でグループを作るであったりという形式の授業ができる。

ICTの導入も大きな変化を促す要因。学習の仕方が変わるので、空間も変わる必要がある。

多様なニーズ・インクルーシブな環境の実現も視野に入れていくと良い。

統廃合を伴う場合は、地域の方々にとって馴染みの薄い学校になってしまう可能性が高くなるため、過程が非常に大事になってくる。

学校はみんなでつくっていくもの。建築と教育は車の両輪。施設が単に新しいだけではダメで、教育をどうしていくかということを考えないと良い空間は生まれない。教室とか空間を道具のように使っていくと良い。教室はこうだからという制約はかなりあるが、教室とか空間をこう変えたらもっといろんなことができるという発想をどんどん出していくことが大事。

全ての施設を更新するには膨大な時間がかかる。既存施設でも試行錯誤してどんどん現状を変えていくことで、実際に建替えるときの具体的な姿が想像しやすくなる。

どのような校舎をつくりたいか、ではなくどのような学校をつくりたいかというイメージを持ってほしい。

事例紹介（東浦町立緒川小学校、流山市立おおたかの森小・中学校、軽井沢風越学園、学芸大学附属竹早中学校、さいたま市立宮原小学校、府中市立府中学園、印西市立いには野小学校、志木市立志木小学校、松阪市立鎌田中学校）

第 2 部 行政説明「一宮市の学校施設の現状と今後について」

教育部次長 平野晴久

第 3 部 パネルディスカッション

コーディネーター 名古屋市立大学 特任教授 鈴木賢一氏
パネリスト 東京電機大学 教授 伊藤俊介氏
パネリスト 一宮市議会経済教育委員会委員長 高橋 一氏
パネリスト 一宮市 P T A 連絡協議会長 岩田佳子氏
パネリスト 教 育 部 次 長 平野晴久

鈴木：それではさっそくですが、まずは、シン学校プロジェクトを立ち上げた経緯について、平野次長からお話を伺いたい。

平野：学校の校舎がたいへん老朽化していたため、2 年前から市長と教育委員のみなさんで教育に係る諸問題について協議する総合教育会議で「学校施設の今後のあり方について」を議題として協議してきました。今年の 6 月に開催した総合教育会議で中野市長から教育委員会に対して、シン学校プロジェクトを提案していただきました。先ほどご説明させていただきましたように、このプロジェクトは、単に古くなった校舎を順番に建替えていくのではなく、市民のみなさんからご意見をいただき、市民のみなさんと共に新しい時代にふさわしい学校の在り方を考えていこうというものです。そうは言いましても耐用年数を超えてしまう老朽化した校舎については、放置できないので新たな時代に合わせた学校づくりと併行して、古い校舎の建替え等も進めなければならないと考えています。

シン学校プロジェクトでは、令和 6 年 4 月から 6 月にかけて、市民のみなさんからご意見を募集します。一宮市民の方であればどなたでも応募することができます。今月から令和 6 年 1 月までに市が考える基本方針の素案を作成して、2 月に素案をパブリックコメントにかけて、基本方針を 3 月に完成させます。

鈴木：さきほど講演していただいた東京電機大学の伊藤先生に、一宮市のシン学校プロジェクトについてお話を伺いたい。

伊藤：校舎の建替えは、計画的に整備していくことが非常に重要で、それに着手されたことは大きな一歩であると思う。もう 1 つは、これまで、学校の建設は行政が主導で行っていくことが多かったと思うが、地域あるいは学区の住民の方が主導で行っていくことは非常に良い取り組み方だと考えている。私自身が一宮市に足を運ぶのは今日が初めてだが、人口密度が比較的高く、公民館は比較的新しいものがあるということは、学校を建替えていく上で有利な条件なのではないかと思う。学校の統廃合や通学区域の変更をする場合にも極端に通学距離が長くないで済むケースもあるかと思う。実情をよく理解していないが、隣の地域が山の向こうという場所よりは、地域間の対話が進みやすいといった条件が有利であると思う。公民館については、先ほどの基調講演で学校と公民館を複合化する事例を紹介したが、逆に公民館が充実している場合には、公民館をサテライトのように活用して学校を運営することも学校の規模があまり大きくない時には現

実的な方法と思う。市民のみなさんから提案して建替えの学校を決めるというプロセスの話があったが、同時に市の方でも老朽化の観点だけではなく、交通状況や通学条件、あるいは住宅地区であったり産業的地区であったりという街の性格の違いを踏まえて、ある程度建替えのプランを考えても良いのではないかと思う。

鈴木：従来のように行政が主導する形だと、どうしても確率的な標準を保つような動きになると思うが、地域のニーズを吸い上げる形だと、各地域の個性を生かすように実情にあった建替えを実現できる可能性がありそうだなという風に捉えられているということですね。

いくつかの選択肢の中に複合化があるが、この複合化とは学校だけではなく公民館であったり子育て関連の施設であったり図書館であったりと学校と親和性の高い公共施設をくっつけていくことで相乗効果を高めていくものだと思うが、地域住民の代表である高橋市議会議員はどのようにお考えか、ご意見を伺いたい。

高橋：私の地元である宮西連区では、宮西小学校の校舎もだいぶ古くなっております。また、宮西公民館もかなり老朽化し、その建替えも懸案となっております。この二つの課題を同時に解決するため、宮西小学校と宮西公民館を複合化して考えていくことも、ありかと思いますが、いかがでしょうか。

鈴木：学校と公民館との複合化ということだが、一宮市としての考えはいかがか。

平野：宮西小学校の中舎は、建築してからすでに 60 年以上経過しています。宮西公民館は、昭和 54 年に建築されており、築 44 年となっています。宮西小学校の校舎の建替えに伴って、公民館と複合化できる可能性はあると考えております。市役所の他部局が所管する施設との複合化などを検討するために、関係各課の課長で構成する内部検討委員会をつくっていますので、内部検討委員会でも検討していきます。

鈴木：学校であれば教育委員会が主体となって考えていくだけで良いが、複合化となると他の部局と一緒に考えていかざるを得ないということですね。

高橋：単なる複合化ではなく、子どもの学習環境の向上に資することも大切であると考えます。もう少し考えを拡大して、小学校と公民館だけでなく、保育園も含めて複合化を行った場合、どのようなメリットがあるか伊藤先生にお聞きしたいのですが。

伊藤：複合化のメリットは、単純に面積の節約になるということがある。とくに公民館と学校の特別教室は機能が似ていますので非常にわかりやすい例。一方で公民館は大人向けに造られており、社会的な活動にも使われている場所なので、機能面では学校よりも設備が整っていたりいろいろな空間があったりと充実している場合があるので、複合化のスケジュール調整に時間がかかる面はあるが、公民館の機能が学校の教育環境の向上に結びつくことメリットは当然ある。保育園や幼稚園との複合化でデンマークの事例でいうと、保育園幼稚園学校が離れていると子どもが 1 日の間にいろいろな場所を移動することになって、なおかつそれぞれのルールが違い接する先生たちも異なることから、子どもの 1 日がいろいろ

な面で細切れになるということが問題視されていたため、一体化するとか連続化するというようなケースがあった。このため、保育園と複合化する場合は、子どもが1日を過ごす場所という風に作る意味ではメリットがあると思う。また、保育と教育の内容の連続も考えることができると思う。例えば、低学年に保育士の資格を持つ方を配置することで、小1プロブレムの解消が期待できるので、教える側の連続性を考えることも非常に良い。いろいろなアイデアがわいてくるのではないかと思う。

鈴木：伊藤先生の講演の中で、校舎を考えるのではなく学校を考えましょうという話があった。恐らく、建築の方を考えることで様々なデメリットみたいなものが生じてしまうところを、子どもたちのためにどういう環境を用意しようかという発想に立ったときに初めて、未就学児から児童生徒まで、子どもは当然1人の人間として連続的に成長していくところで、それぞれの成長段階に相応しいところに個別に施設があるのではなく、成長段階に応じた配慮もしつつ連続的に学習環境を整えていくのは複合化の1つの姿だと思う。志木小学校は私も実際に見たことがあるが、非常に画期的な仕組になっていて、公民館を学校が使っているような形なので、子どもたちと地域の方々がとても良いコミュニケーションを築いていると感じた。一宮市PTA連絡協議会会長の岩田さんは保護者の立場として、複合化について何か意見をお持ちか。

岩田：先ほど伊藤先生が複合化のメリットを仰いましたが、現代は少子化が進み、兄弟が少ないなど、今の子どもたちはとても狭い人間関係の中で生きていると感じる。年代を超えた交流をする機会が少ないため、様々な年代の人と交流できる環境があることはいいのかもしれない。

鈴木：学校の中でも学年別に行動することが多いが、だからこそ縦繋ぎの活動を導入している学校も多くある。岩田さんは、複合化をしたら、どんな施設と複合化したらよいかと思うか。

岩田：保護者としては、保育園や児童クラブと複合化していただけるとありがたい。保育園なら、保育園児が小学生と交流することができ、小学校に入学してからの生活の変化に適応しやすくなるのではないかと。また、児童クラブが小学校内にあると、放課後の児童クラブへの移動も安心である。ただ、複合施設になると児童生徒以外の出入りが増えるため、子どもの安全対策（不審者対策）がどうなるのか気になる。他市町村の先進事例ではどのように解決しているか伊藤先生に教えていただきたい。

伊藤：すごく大事な課題であるのと同じにお答えが非常に難しい。学校の規模や立地や周辺状況によって様々な要因があるので、こうすれば良いというものではなく個別に考える必要がある。いくつか考えられることとしては、大阪の池田小学校は、児童殺傷事件の後、施設の造り方を大きく変えたが、外側に対しては非常に守りを固めた形式になっているが、学校の中は開放的になっていて大人の目がよく通るようにできている。いろいろな施設が複合化しているケースで地域の人々が学校の中の建物と建物の間を通り抜けられるように造っているケースも複数ある。この場合は、閉じて守るというよりは人の目で守るという考え方。このケースで

は、前提として子どもがいる時間には必ず大人もいるという状況であるからできることで、職員室や先生の作業コーナーが分散して置いてあったり事務室や学童保育の場所があったり大人が常駐しているスペースがある意味戦略的に配置されていて、人が通る道は誰かしらの視野に入るといった造り方をしているケースもある。先ほど鈴木先生もあげられていた志木小学校の場合も、公民館の側に職員室があるので、真ん中のスペースを含めて全部の出入りのスペースを大人が見ている形になっている。なおかつ、入口には地域のボランティアがいて受付をしているので、誰でも入っていい公共施設にあっても見ている目があったりクッションが入ったりしているようにできている。安全対策は、施設の造り方を工夫することもあるし、人の配置の仕方で工夫することもあるので、学校ごとに考えていく課題だと思う。

鈴木：豊田市の中学校で、交流館（公民館）と中学校を同一敷地の中に建設した事例に携わった。このときも地域の方が大変不安視していたが、地域の方々が学校と地域を繋ぐコーディネーターとして活動できる拠点を1つ持つことで、大人の目がそこに働き、開校後、高校生が出入りしたり地域の方々が出入りしたりして、学校というより街の様相を呈していた。結果、交流も起こったし、不安視していたことは杞憂に終わった。けれど、これが全ての場合に適用できるかは慎重に考える必要がある。複合化することがイコール危険になると単刀直入に考えなくても良いのではないかと考えている。

岩田さんのお話にあった放課後児童クラブのような機能は、共働き家庭にはどうしても必要なものなので、一宮市の中でも待ち状態になっているようなケースもあるのではないかとと思う。子どもが授業が終わってから過ごすスペースを整備していくことは非常に重要だと思う。例えば、小学校を他の公共施設と複合化した場合、建物の高層化・大規模化や、一般市民が自由に出入りする建築空間にすることにより、災害時の子どもの避難行動に影響することは考えられる。さきほど仰った、利用者が安全・安心に使用するための視点は、こういった面でも生かしていく必要がある。古くなった校舎を建替えていくだけではなく、古くても良い校舎は残していくという考えについて、伊藤先生はどう考えるか。

伊藤：ケースバイケースであるのが大前提だが、古くてどうしても危険な部分がある場合は、減築して使い続ける手法がある。管理しなければいけない面積を減らしつつリニューアルするという造り方は1つあると思う。今の施設の構造の造られ方がそもそも教室のサイズを前提にしているので、その部分で今の施設を使うときに大きくは変えられない部分であるとは思いますが、改築例や改修例を見ると、うまい具合に空間を外側にくっつけるとか、構造補強を兼ねた薄皮1枚の空間をつけ足してそこが新しいスペースになるという造り方もある。学習する集団がクラスごとではなくより小さくなっていくと、余裕教室を活用して授業の幅を広げつつ現在の施設を使うことができる。建替えまでの移行期の使い方は様々考えられると思う。

鈴木：瀬戸市のにじの丘学園という大規模な小中一貫校の事例があったが、そのときに廃校になった中学校を活用するために、民間が廃校舎を活用して私立の学校としている。従来の校舎の教室と廊下の間にある壁を取払い、2つの棟の間

に平屋の図書館を建設し、ユニークなラーニングセンターを造った。私立だからこそできたことと思うが、公立でも十分可能ではないかとも思う。今ある校舎を活用することも1つの大きな選択肢としてあって良いと思う。

小中一貫校の是非についてはどのように考えるか。高橋議員に伺いたい。

高橋：小中一貫教育につきましては、私はモデル校指定して取り組むこともありかと考えます。ただ、1連区1小学校1中学校で小学校と中学校が隣接、若しくは距離が近い必要があるので、条件的に限られますが。メリットとしては、小中9年間で継続的に子どもたちの指導ができるということで、連続性・柔軟性を活かした教育効果が期待できます。ただ、小学校卒業時の達成感がなくなるので、成長の大切な一区切りを実感しにくくなるというデメリットはあると思います。

鈴木：確かに、小学校6年生に向かって成長していく姿が親御さんも先生も楽しみだと思うので、7年生が続くことをデメリットに感じる面はあるかもしれない。しかし、9年間を一体的に捉えるのではなく、4年・3年・2年や5年・4年など何か1つ節目を作ることで乗り切れることはできるのではないかと思う。

では、学区再編についてはどうか。岩田会長は浅井町にお住いということなので、浅井町の状況を踏まえてご意見をお聞きしたい。

岩田：校舎の建替えと同時に、学校区再編も視野に入れているとのことだが、通学距離が長くなることによる児童生徒への負担が心配である。私が住んでいる浅井南小学校の学区は、南北に広く、隣の浅井中小学校の学区は、東西に広がっている。

鈴木：通学距離が長くなる問題の背景には、安全性の確保の問題もあると思う。市としては、通学距離が長くなることについて、どのようにお考えかお聞きしたい。

平野：文部科学省は、通学距離については、小学校は概ね4km以内、中学校は概ね6km以内であることが適正としていますが、一宮市では、小学校は2km以内、中学校は3km以内を適正な通学距離としています。学区を再編することによって、通学距離がこれまでよりも遠くなるということは考えられますので、通学距離等については配慮が必要と考えます。

鈴木：通学については、地域の方々に見守りをしていただくなど、学校だけでは解決できない問題が控えていると思う。今回のプロジェクトは、長いスパンで考えなければならないので、対象校を市の方で決めてほしいという意見もあると聞く。地域の方もどのように意見を出せばいいのか迷うところがあるかもしれない。市としてのお考えをお聞きしたい。

平野：来年の4月から意見の募集を始めますが、募集の際には、校舎の更新等についての基本的な考え方を基本方針として示します。本日、今後、地域でどのように進めていけばよいかなどが書いてあるハンドブックをお配りしました。お読みいただいて、ご不明な点などがございましたら、教育部総務課へお尋ねください。

鈴木：古い学校を更新してだけでなく、学校づくりを通してのまちづくりという観点からも、非常に興味深いプロジェクトと思う。これからの学校の在り方、地域の在り方を一体で考え、実現することができれば、他市にも参考とされる事例になりうるのではないか。行政と市民で議論を尽くし、是非実現してもらいたい。